平成２４年６月19日　00071号

北見武道通信

編集者:佐 藤 寿 春
北見市幸町８丁目４-４(佐藤整骨院内)
NPO 法人北見市武道振興協会事務局発行
直通:090-5986-0839
代表:0157-61-4804　Fax:0157-23-0581
satou.tosiharu@navy.plala.or.jp

ニュースレター【名論卓説】柔道家　山下泰裕氏の「武道必修に期待すること」を紹介します。

二〇一二年四月から、中学校の体育の授業で武道が必修になった。柔道、剣道、相撲のなかから学校で一種目を選択して教えるという形になる。文部科学省のホームページの「中学校武道・ダンスの必修化」について書かれたページでは武道をこう定義している。「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動です。また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動です」　私は柔道家なので、ここでは武道のなかから柔道をピックアップしてお話ししたい。必修科目になったからには、中学生が柔道を理解し、柔道を好きになるような授業を展開してほしいと思う。授業時間だけではなく、生涯を通じて柔道をやりたいと思えるような、興味を喚起する授業にしてほしい。技が上手くなることや勝ち負けなどは二の次、三の次でいい。考えてみれば、柔道着を着て畳の上に立つだけで、日本の伝統的な習慣に触れられることを知ってもらいたい。畳の上に裸足で立つ　着物（柔道着）を着る　正座をする　日本式の座礼をする　畳の部屋が急速に減少している現代の日本では、畳の上で正しい姿勢で正座をする機会はほとんどなくなってしまった。そうなると、座礼をする習慣が残っているほうが不思議である。時おり浴衣を着る機会があるかもしれないが、日常的に着るものは洋服がほとんどになった。子どもたちにはぜひ、日本人の日常生活から失われつつある伝統的な習慣、考え方、ひいては日本人の心を学んでほしい。柔道では戦う相手を敵とは考えない。柔道で最も大切なのは、戦った相手を尊敬することである。相手がいるからこそ自分を磨き高めることができる。この気持ちを表しているのが日本式のお辞儀である。イスラム圏では、アッラーの神以外には頭を下げることはないそうだ。欧米では感謝や敬意ではなくお詫びの意を表すときに使われることが多いという。一方、日本では相手に対する敬意を表すときにも頭を下げる。子どもたちには、心から相手を尊敬することが礼につながることを学んでほしい。柔道の「道」とは何か。 道というのは、柔道を通じて学んだことを、日常生活や人生で生かせることだと考えている。きちんと礼ができること。これを柔道場だけでやっても意味はない。家に帰っても、学校の教室でも実践していくことが大切になる。柔道を学んで体が丈夫になり、精神的にも逞しくなれば、次はそれを日常生活でどのように生かしていくかを考えられる子どもになってほしい。電車やバスで席を譲る、お年寄りの重い荷物を持ってあげる、困っている人を見かけたら声をかけて支援を申し出る。そうした精神を学び取るだけでも、武道必修化の価値が生まれると思う。そうなると、教師の指導力が問われることになる。武道を教えるには専門的な知識や経験が必要になるので、十分な経験がない先生には外部から専門家のサポートを入れてもいいだろう。しかしこれについては、いまのところ各自治体で対応が異なっている。まだ十分な態勢が整っているとは言えない状況ではないだろうか。武道必修化の目的は、つまるところ武道を教えることではない。武道はあくまでも切り口にすぎず、柔道や剣道や相撲を教材として日本の文化や日本の心を学ぶことだということを忘れてはいけない。時代とともに変化するものがある一方、変わってはいけないものもあると思う。日本古来の大切なものが失われつつある昨今、すべての子どもたちが武道を学びながら、日本の文化や日本の心を体得してほしいと願っている。　　**新潮新書 山下泰裕「背負い続ける力」より**